

「聖霊に禁じられ、道が開かれて」

使徒言行録16章6節～15節

使徒言行録というのは、キリストの弟子達によって、初めて教会が形作られ、又世界へと伝道されて行った伝道の記録です。しかし、その伝道の記録でありながら、単なる報告書というのではなく、初代教会のキリスト者達を動かした力がありました。その力が根底でキリスト者を支え、突き動かしていった記録なのです。その力というのは、聖霊の力です。聖霊の働きこそが初代教会を形作って行ったのです。そこに目を向ける時、使徒言行録を本当の意味で理解出来ることになり、又教会の力を理解することが出来ると思います。

更に、この初代教会を形作って行った力を、今私達の教会で、或いは私達の生活の中でも体験し、力強く生かされているならば、使徒言行録の記録を自分の出来事として読んでいくことが出来るのです。

使徒言行録が記されていく最初の1章に、「あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして、エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリヤの全土で、また、地の果てに至るまで、わたしの証人となる。」と記されています。この復活の主の言葉が、様々な形をとって次第に実現して行ったということが、使徒言行録の記録なのです。

キリスト教は、エルサレムというアジアの片隅からささやかな歩みを始めたのですが、キリストの愛と真実に触れた人々が、その福音を携えてあらゆる所に運んで行きました。その福音を運ぶ役目を果たした人々というのは、ガリラヤの漁師達であったり、取税人であったり、名も無い婦人達でありました。しかし、福音は運んでいった人達の力を超えて進んで行きました。その事を考えると、福音の前進は聖霊の力によるものであるという事が、誰でも感ぜざるを得ないのです。9章31節に、「こうして、教会は、ユダヤ、ガリラヤ、サマリヤの全土地方で平和を保ち、主を畏れ、聖霊の慰めを受け、基礎が固まって発展し、信者の数が増えていった。」と記されていますが、こういう言葉が所々に記録されており、使徒言行録の前半では、様々な人々によって福音が運ばれていったことを伝えています。

16章は、後半に入るところですが、このあたりから、パウロという優れた人物が活躍し始めたことを伝えています。パウロは、キリスト教を迫害する人々の先頭に立っていた人ですが、復活のキリストに出会った時から、福音を宣べ伝える器として、神様に豊かに用いられました。そして、初代教会の基盤を形作っていった人物です。

そのパウロも、決して順風満風の前進ではなく、幾多の苦しみと戦いの歩みであり、誤解との戦いだったことが、彼の手紙などを読んでいくとよく分かります。例えば、コリントの町へ、初めて伝道に行った時、彼は、「そちらに行ったとき、わたしは衰弱していて、恐れに取りつかれ、ひどく不安でした。」(コリント2章3節)と言っています。パウロも人間です。いろいろなことに悩まされ、不安でした。思うようにならなかったこともありました。

そのパウロを根底から支え、押し上げて道を開いていった力がありました。それは、聖霊の力です。その聖霊の働きこそが、福音伝道の主役だったのです。

けれども、パウロ達の福音伝道がいつも前進のみだったかという、そうではありませんでした。今日の聖書には、「アジアでの伝道が聖霊によって禁じられ、そこで、ガリラヤの北の地方への伝道を計画したところ、今度はイエスの霊がそれを許さなかった。それで、トロアスに下った。」とあります。

そもそも、この第二回目の伝道旅行は、そのスタートにあたって、パウロとバルナバが、誰を連れて行くかということで、もめにもめたのです。パウロとバルナバと言えば、切っても切れない盟友であり、同志でもありました。けれども、このことを巡って、ついに別れ別れになってしまい、パウロはこの伝道旅行を計画したのです。そしてさらに、伝道旅行の途中で、聖霊に禁じられ、イエスの御霊にも許されなかったということになります。八方塞がりになってトロアスに来たと思えません。あの情熱的なパウロが、これほど八方塞がりになるとどんなにかショックだったろうと想像できます。「聖霊の力を受けて、地の果てまでも福音を宣べ伝えよ。」と言われた主の約束にも拘らず、その聖霊によって禁じられたり、許されなかったりするのですから、ただ、うまくいかなかったということではなく、何か本質的な問題があったと思えません。

しかし、トロアスへ来たパウロは、夜一つの幻を見ます。それは、海を渡り、マケドニアで伝道するようという幻です。これは思いがけない道です。アジアを伝道の地として出発してきたパウロにとっては、海を渡り、ヨーロッパへと伝道することは、思っても見なかったことでした。しかし、それが神様の導きであり、御心だったのです。聖霊によって禁じられたのは、単に後退の為の後退ではなかったのです。後退は必ず次のステップへの備えです。パウロは伝道者として、気落ちしてトロアスにやって来ましたが、神様はそこに1人の同労者を用意しておられました。パウロが幻を見たとき、1人のマケドニア人が立って、「マケドニア州に渡って来て、わたしたちを助けてください」と言ってパウロに願いました。このマケドニア人というのは、この後、パウロと常に行動を共にして、使徒言行録を記した、医者でもあるルカでした。パウロは持病がありましたから、このルカに診てもらったことでしょう。パウロは、マケドニア出身であるこのルカとの出会いから、マケドニア、ギリシャ、ローマへと伝道の幻が新たに沸きあがってきたことと思います。この時パウロは、「神様がわたしたちを召されているのだと、確信するに至ったから、すぐにマケドニアに向けて出発することにした。」と記しています。彼は、何度も道を替え、後退を余儀なくされ、トロアスに追い詰められのですが、主が用意されていた新しい出会いによって、道が備えられていたことを示されたのです。聖霊によって抑えられ、禁じられた道が、ヨーロッパに向けて激しく押し出されることとなり、福音がヨーロッパへと広がってゆく記念すべき出来事となりました。そして、キリスト教はヨーロッパにおいて大きく花を咲かせ、今も世界で着実にキリスト教の伝道は進んでいます。現在、全世界60億の人口の中で、20億以上の人々がキリスト教になっています。

私たちも、トロアスを経験することがあります。聖霊によって禁じられる時があります。取り繕うことも出来ないような中で頭をたれるしかなく、ただ、主に向かって助けを祈り求める以外ない時、神様は、新しい道へと、新しい可能性の出発点へと導いて下さるのです。教会というのは、直接マケドニアに行くことは出来ません。必ず、トロアスを経由して渡ってゆくのです。私達は、行き詰まりのトロアスの経験を通して、マケドニアの道を示され、望み見ることが出来るのです。